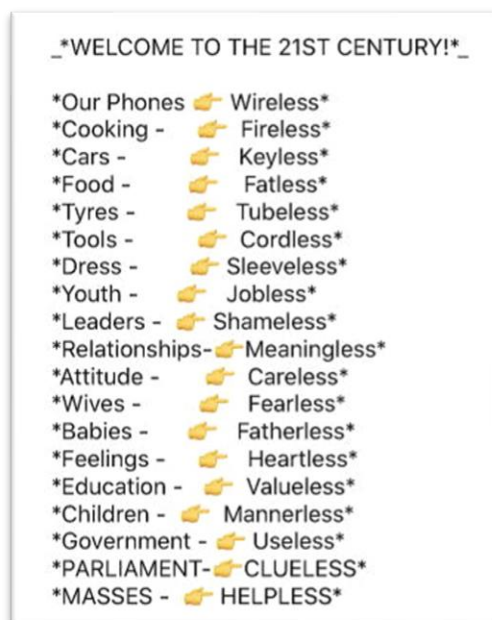


「なし」の時代に「あり」を求めて

川口基督教会牧師 司祭 ステパノ 柳 時京

最近知り合いの方から次のような文章を送っていただきました。21世紀へようこそ(「Welcome to the 21st century」という英文ですが、和訳で紹介します。

「電話はワイヤレス、料理は火なし、車は鍵なし、食べ物は脂肪なし、タイヤはチューブレス、道具はコードレス、ドレスはそでなし、若者は仕事なし、指導者に恥なし、関係に意味なし、態度に気配りなし、妻に恐れなし、赤子に父なし、感情に心なし、教育に価値なし、子どもに礼儀なし、政府は役に立たず、国会は無知無能、大衆は途方もなし」。全て「なし」(less)という語尾でおわる言葉が羅列されており、確かに前の20世紀と取って代わった、最近の生活面での変化や傾向を示しています。この中で、モノに関して見てみると、あっても良いのだが、無くてさらに便利になることが多いです。しかし、ヒトに関しては、前世紀より進むどころか後退していることが分かります。



私の子どもの頃までは、誰もが時間が経てば、世界は自分の時代よりはきっと良くなるであろうと、大いに淡い夢や希望を持っていました。大学さえ終えれば就職の心配はなく、ある程度社会人として働けば生きていけると、疑わず信じ込んでいました。社会の進展についても、政治や経済、教育や文化などの面で、きっと今以上に進むと見込んでいました。短い自分の経験で見ても確かにモノも社会も進んで来ました。以前は想像すら出来なかったモノの進化に日々、驚くこの頃です。反面、ヒトはどうでしょうか。モノの発達に比べて、そのまま、あるいは以前より劣った感じではないでしょうか。社会全体で見ても、格差が広がり、民営化の名目で公共の制度が思ったほど進んでないことがわかります。あるべきことがなくなりつつあることで、このままだと私たちの未来図は灰色に塗られるようで、未来なしとまで言っても過言ではないかも知れません。

中でも憂慮されるのは、ヒトの情けのなさが広がっていることです。聖書は、人とお互いに愛し合うこと、情け深い人になることを教えていますが、先の「なし」をみると、希望的とは言えません。特に、モノ中心の21世紀に「信仰なし」の時代になることは避けなければなりません。私たちは、より厳しい宣教、伝道の時代を迎えて、「なし」ではなく「あり」

を求めて生きたいと思います。

「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。」（コリントの信徒への手紙 I 13:4）